

能謡曲と俳句

— 身体で日本語の美しさを体験する



梶原 宣俊

一、はじめに—能謡曲との出会い

私は敗戦の翌年に生まれ、小学校時代から福岡板付米軍基地のラジオ放送を聞いていた。流暢な英語と音楽を聴きながら、アメリカに憧れ、中学高校と英語クラブに入り英会話を勉強した。日本語より英語が好きであった。米国留学に憧れたが家庭の事情で叶わず、大学に入ってからは、日本の近現代史や戦後思想文学に関心を持ち学んできた。

大学卒業後、広島YMCAという国際教育

団体に就職し、専門学校や日本語学校の経営と教育、国際交流に尽力してきた。海外十五か国に三十回以上訪問し、青少年の交流を体験してきた。夜の交流会で各国の若者たちが自国の文化芸能を披露してくれた。わが日本の若者は日本の歌を歌うくらいである。私は自分自身を含めて、若者たちが日本の伝統芸能文化を全く知らないという現実に愕然とした。ちょうどその時期、私は福山YMCAに転勤になった。これが大きな人生の転機となる。福山には全国でも珍しい能楽堂がある。そこで喜多流能楽師大島政允氏とその家族に出会い、謡曲を習い始めた。すでに五十二才になっていた。きっかけは福山県立歴史博物館十周年記念行事として開催された「音楽で綴る福山千年の歴史絵巻・瀬戸内の夜明け」組曲にナレーターとして出演したことである。これは大島先生の奥様である大島泰子さんの

企画であった。福山に転勤することがなかったら、私は能謡曲に出会うことも、日本の伝統芸能文化に関心をもつことも、日本語の美しさに感銘を受けることもなかったであろう。

毎月四回、仕事が終わって夜に自転車で能楽堂に通い続けた。漆黒の闇の中で大きな声を出しながら家に帰った。初めて出会う謡曲は六〇〇年の歴史の重みを感じさせる魅力的な日本語の美しさに満ちていた。謡曲の典拠となっているのは「平家物語」や「古今和歌集」「万葉集」をはじめ五十以上の文献にのぼる。中国の古典も三〇以上ある。謡曲は美しい日本の伝統的言語文化の宝庫である。その名文を、腹式呼吸によって大声で謡う。身体の中に五七五調のリズムが心地よく響きあう。謡は全部で二百曲以上あり、私は全部で百曲の稽古をさせていただいた。そして、異例の速さで教士免状をいただいた。六〇歳の時で

ある。

私は、多くの能を鑑賞し、謡を稽古し、能舞台で地謡も務めた。台湾でもアジア太平洋芸術学会で「黒塚」の地謡を務めた。

私はこのような能謡曲体験を通じて、次第に日本語の美しさと伝統的語り音楽に興味を持つようになった。団伊玖磨の「日本音楽史」を読み、お経・声明から始まる日本の豊かな語り音楽の魅力に取りつかれ、小唄・長唄・端唄・浪曲・浄瑠璃等、CDを買ってきて真似をした。

定年退職後、私は妻の故郷である鹿児島県出水市に定住することを決心し、謡曲教室を開いた。わずか三名であったが一生懸命指導した。鹿児島謡曲連合会及び出水市文化協会に入り、毎年秋の発表会に出演してきた。

二年後、大学教授をしていた高校時代の親友から東京の日本教育大学院大学の仕事の話

があり、私は初めて東京で三年間働いた。多忙な仕事の合間を縫って、私は毎週日曜日に浅草に通った。そして、浪曲、浄瑠璃、新内節を鑑賞し、習いに行った。目黒にある喜多流能楽堂にも月数回通い、東京在住の大島輝久氏に稽古をつけてもらった。東京は日本最大の現代都市でありながら、伝統文化芸能の宝庫である。江戸時代が生きており、私は日本の伝統芸能文化を堪能した。私は長年、教育の仕事をしてきたので、和文化教育大会でも発表し、その成果を「伝統文化教育論―日本の語り音楽の魅力」(B5六十一P)として小冊子を発行した。東京の三年間は私にとって人生後半の最大の充実した思い出である。

内容は以下のようなものである。

はじめに―なぜ伝統文化教育なのか

第一章 伝統文化と学校教育

・ 伝統的な言語文化の継承―能謡曲のすすめ

・ 日本の語り音楽の歴史と魅力

・ 学校教育への期待

第二章 日本の伝統と創造

・ 伝統と革新、不易と流行

・ 変わってはならないもの・伝統とは何か

・ 二度にわたる伝統断絶の歴史―アイデンティティの喪失

・ 日本の伝統文化

・ 着物の思想文化と武士道の思想

第三章 江戸の芸能文化

・ 能と謡曲

・ 世阿弥の「風姿花伝」における人生論

処世術

・ 歌舞伎、文楽、義太夫節、新内節、浪

花節

・口演 日本の語り音楽の魅力

第四章 能に学ぶ古典の世界

・大伴旅人論―権力闘争と亡妻挽歌

・小説「鞍のむろの木」

・俊寛論―鬼界島紀行

第五章 芸術とは何か・芸術文化立国論

おわりに―地域・学校を活性化する伝統文化教育とキャリア教育

二、俳句との出会い―能俳句の交流

そして二〇一九年の一月、思いがけなく俳句との出会いが始まった。

毎年一月に開かれる文化協会理事の新年会で、新しく理事になられた白男川孝仁さんが偶然隣に座っておられたのである。初めてお会いし、お話していると「夕鶴俳句会」の主宰者で、俳句会に入りませんかとお誘いを受けた。私は俳句川柳短歌にも多少関心を持

っていたので二つ返事で入会することになった。同時に、能謡曲に関心があるので謡を教えてほしいとの要望があり、能謡曲と俳句の交流が始まった。それまで、能と俳句はあまり関係ないと思っていたが調べてみると、意外に深い関係があることを知り、驚いた。

俳句は、古代から奈良時代にかけて五・

七・五・七・七という短歌の定型が決まり中国の漢詩に対し「やまとの歌」「和歌」と呼ばれるようになった。平安から室町にかけて連歌、元禄時代には連句、発句と呼ばれ、明治時代に正岡子規によって「近代俳句」として確立されたものである。俳句は私にも身近な存在ではあったが、いざ作ってみると予想以上に難しい。私の句は実に平凡で通俗的なのである。わかりやすいだけである。

最初は自分の思いや考えを五七五にしただけのものである。わかりやすいけど面白く

もおかしくもない。私は真剣に俳句の勉強を始めた。

白男川さんに推敲していただきながら毎月一回の俳句会が楽しみで毎日、俳句に取り組み、日本語の感覚を磨きなおしている。特に淵脇護先生の毎回のコメントは的確で大変勉強になる。日本語には、漢字、ひらがな、カタカナがあり豊富な表現が可能である。俳句は、やり始めると四季の変化に敏感になり、日本語の魅力や美しさを再発見しつつある。季語は二千五百以上あり日本人の感性と歴史の宝庫である。

一年間の俳句体験を通じて、私の言語感覚の貧弱さ、鈍感さ、つまりは思考の貧弱さ、人間の浅薄さをいやというほど痛感させられた。それは、これまでの人生の生き方そのものを問われる辛い作業、過程であり続けている。

私はこれまで、書くことと話すことが好きで、高校以来詩や小説を日記に書いていたが、全く文才がなく結局評論や随想などを書いてきた。講演もかなり多くこなしてきた。モットーは「わかりやすさ」であった。難しいことをいかにわかりやすく書き話すかが私の関心事であった。

そしてわかりやすい「情報社会論」や「太宰治論」「吉本隆明論」「キャリア教育論」を書き出版してきた。

しかし、俳句はわかりやすさではない。論理ではない。評論ではなく詩である。私が最も苦手とする分野である。

白男川さんに推敲していただきながら毎月一回の俳句会が楽しみで毎日、俳句に取り組み、日本語の感覚を磨いている。

俳句は、やり始めると四季の変化に敏感になつてきた。これまで自然は好きで特に海が

好きであつたが、自然の移り変わりを漠然と感じていただけである。俳句を通して、日本語の魅力や難しさを再発見しつつある。季語は二千五百以上あり日本人の感性と歴史の宝庫である。謡曲と俳句には、日本の伝統文化と美しい日本語のリズムが息づいていることを改めて感じ始めた。謡曲と俳句は、ともに日本文化の深い味わいがあり、実に楽しい。

俳句の季語には日本の長い伝統文化、四季の豊かな感性が凝縮されており能謡曲の古文や歴史物語の世界と通底している

能謡曲もまた奈良時代に、中国から伝来した散楽が日本古来の芸能と融合し、猿楽として発展し十四世紀後半、観阿弥世阿弥によって夢幻能が完成する。

謡曲は月二回教えている。有名な「高砂」「羽衣」から始まり現在「鬼界島」と「船弁慶」を教えている。白男川さんは、郷土の歴

史にも関心があり、さらに意気投合している。私も「いずみ郷土研究会」に 六年前から入会し、研究誌に毎回発表してきた。特に、俊寛との出会いは劇的であつた。私は「鬼界島」(他流派では「俊寛」)に福山時代に出会い、その悲劇的物語と名曲に感銘を受けていた。鹿児島県出水市に住み着いて、東京から戻つた時、私は野田の感応禅寺の近くで偶然「俊寛僧都碑」を発見した。

なぜこんなところに碑があるのかと不思議に思い郷土史を調べていくと、何と阿久根、野田に俊寛が逃げてきてここで亡くなったという伝説と遺跡があることを知り、狂喜して調べ始めた。その成果は、「最期の俊寛伝説」として「郷土研究誌」に発表した。さらに、野田領主であつた島津忠兼公の生誕四五〇周年記念行事があり、私も実行委員として協力してきた。そして、悲運の名君である島津忠

兼公を偲び小謡を創作し、野田の若宮神社で毎年八月八日に行われる例大祭で披露してきた。白男川さんは、これに共感され、シテとワキのセリフを追加され、今年の例大祭にて二人で発表することになった。

謡曲と俳句には、ともに日本の伝統文化と美しい日本語のリズムが息づいている。俳句の季語には日本の長い伝統文化、四季の豊かな感性が凝縮されており、能謡曲の古文や歴史物語の世界と通底している。

能謡曲の原典は八十以上に上る。さらに中国の文献は二十以上ある。万葉集はじめ古今和歌集、平家物語等実に多様である。能謡曲を学ぶということは、日本や中国の古典をまなぶことである。宝生流教授である門脇達祐氏の「謡曲基歌集」(平成十四年)に詳しく述べられている。貴重な労作である。

さらに調べていくと、俳句の巨匠たちが能

謡曲に関心を持ち俳句も作っていることが分かり狂喜した。正岡子規や高浜虚子、夏目漱石は、能謡曲をたしなみ共に交流している。

そして、能謡曲に深く関心を持ち俳句にも作っていることが分かってきた。私は驚くと同時に嬉しくなり、能謡曲と俳句の関連を調べていった。

まず高浜虚子である。俳句を始めて、私は分厚い歳時記を買い求め、季語の勉強をしてきた。私は、たまたま高浜虚子の孫である稲畑汀子の「大きな活字のホトトギス新歳時記」(一九九一年三省堂九四九p)を愛用してきた。これは虚子が編集した歳時記に基づき改訂したものである。

この歳時記は字も大きく、季語の数も多く、わかりやすい説明と多くの先人たちの名句がたくさん掲載されている。私は、その中でもこれはいいなと思う句が高浜虚子の句である

ことが多いことに不思議な縁を感じていた。

私は根が単純で、浅学菲才であるから、あまり難しい技巧を凝らした俳句は苦手で全く理解できないのである。その点、虚子の句は私にはとても分かりやすく感じた。「花鳥諷詠」

「客観写生」を主張してきたせいであろうか。

三、能と俳句の共通性と関連性―高浜虚子に学ぶ

さて高浜虚子は、生涯に二十万句を超える俳句を詠んだといわれている俳句の巨匠であるが、能もまた、プロの能楽師なみの実力を有していた。

謡曲だけでなく、鼓や笛もこなし、仕舞やシテワキを演じ、新作能まで作っている。私など謡曲だけで、足元にも及ばない。

三村昌義の「虚子能楽関係年譜」に基づき、虚子の能と俳句の歴史を簡単に要約してみる。

高浜虚子は、一八七四年（明治七年）愛媛

県松山市の旧松山藩士池内政忠の五男として生まれた。虚子の家柄は、旧幕時代伊予松山藩の演能に深くかわり祖父は宝生流を習い、父は松山での演能の世話役を引き継ぎ、能楽に造詣が深く、明治維新後の松山の能楽は虚子の父が世話していたという。兄の池内信嘉は宝生流から喜多流に転じ、明治三十五年に上京し、雑誌「能楽」を発行し維新後衰退していた能楽の復興に尽くした。虚子もまた幼児から能に親しみ、自ら能を舞い、大小の鼓を打ち、新作能まで創っている。

九才で祖母の実家の高浜家を継ぎ、一八八八年明治二年伊予尋常中学校（現松山東高校）に入学する。一歳年上の河東碧梧桐と同級になり、彼を介して正岡子規に俳句を教わる。明治二四年、子規に「虚子」の号を授かる。明治二七年、二〇歳の時、下宝生流家元に碧梧桐とともに謡を習う。

明治二八年、松山で漱石と出会う。

明治三〇年「ほととぎす」創刊

明治三五年 二八才 子規庵や虚子宅で

謡会を催す。「能楽」に「謡

曲羽衣」を掲載。

明治三六年、宝生会で「鞍馬天狗」のワキ

をつとめる。

明治三七年 三十歳「能楽」誌上に「第一

回謡曲放談会」掲載

以後

明治三九年 三十二才 漱石を能に招待、

謡を進める。

明治四十年〜四十二年 三十三才〜三十

五才 漱石を訪ね、謡をうた

う。

大正二年 三八才 健康を損ねいよいよ

よ能に親しむ、喜多六平太の

「巴」を賞賛

大正三年 三十九才 鎌倉能舞台完成

大正八年 四十三才 新作能「実朝」発表

昭和三十四年 八十四才 皇太子成婚祝

賀曲として舞囃子「花一時に開

く」を作詞 四月八日永眠

(三村 昌義「虚子能楽関係年表」から要約)

以上が高浜虚子の能の歩みの要約である

が、プロの能楽師以上に造詣が深く、「能楽」

雑誌に発表された文章は、優れた能楽評論に

なっている。私は謡曲だけが、虚子は仕舞

から能のシテワキの役を演じ、新作能まで創

作している。その才能の豊かさに驚かされる。

宝井其角は「謡は俳諧の源氏」と書いている。

私は、高浜虚子に出会うことにより、俳句

だけでなく、能の理解もまだまだ不十分であ

ることを痛感させられた。いわんや俳句おや

である。

以上の反省を踏まえながら、能をベースにした俳句を調べてみた。予想以上に多くの俳句が作られていた。子規が約七〇句、漱石が約七〇句、虚子はその何倍もの句を作っているが数は現在不明である。

ここでは有名な句をいくつか紹介してみたい。

江戸期先駆作家

・おもしろうて やがて悲しき 鵜舟哉

(芭蕉)

・朝風の 吹きさましたる 鵜河哉(蕪村)

正岡子規

・寒月や 人去るあとの 能舞台

・松風や 謡半ばや 春の雨

・あつらえの 扇出来たり 謡初

・草の家の 隣に遠く 謡初

・謡ヲ談ジ 俳句ヲ談ス 新茶哉

高浜虚子

・鼓あぶる 夏の火桶や ほととぎす

・鏡板に 秋の出水の あとありぬ

・能すみし 面の衰へ 暮の秋

・一面に 月の江口の 舞台かな

・夏潮の 今退く平家 亡ぶ時も

河東碧梧桐

・神事近き 作り舞台や 楠若葉

・曲すみし 笛の余韻や 春の月

・両肩の 富士と浅間や 二日灸

・薪能 小面映ゆる 片明かり

・舞殿や 薫風昼の 楽起こる

夏目漱石(熊本時代)

・白雲や 山又山を 這い回り

・憂ひあらば 此の酒に酔へ 菊の主

・弁慶に 五条の月の 寒さ哉

・落ち延びて 只一騎なり 萩の原

・梅散るや 源太の箆 はなやかに

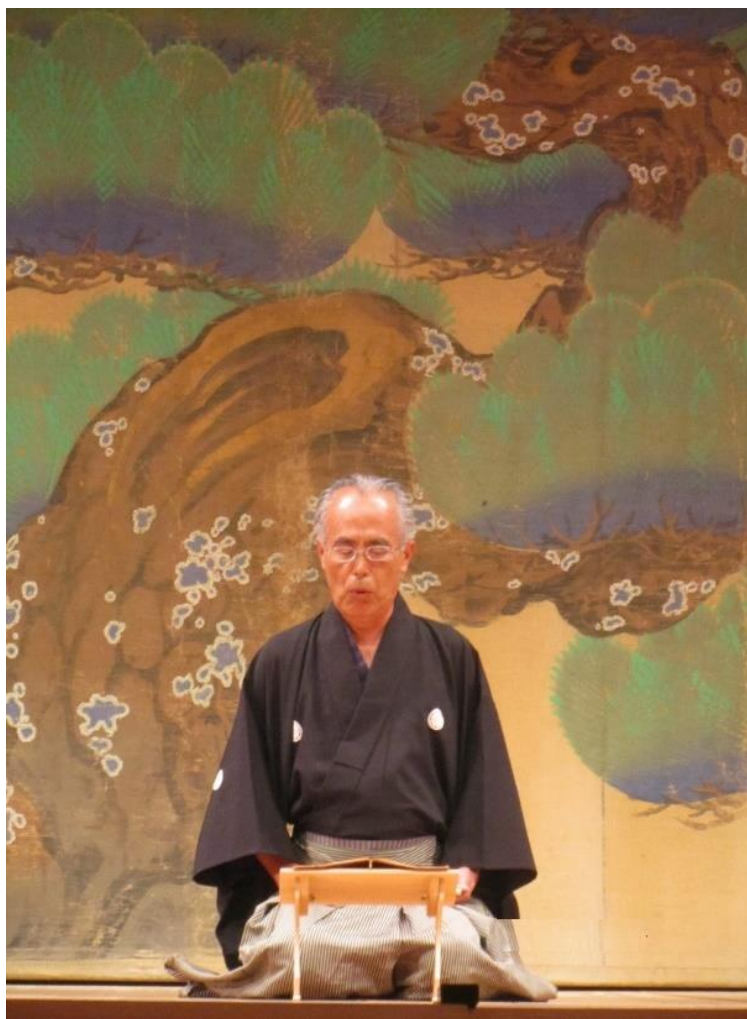
四、おわりに―世界詩としての能と俳句

二〇一八年、青山学院大学英米文学科同窓会創立二〇周年の記念講演で、福岡出身の詩人高橋睦郎が「世界詩としての能と俳句」と題して講演をしている。

高橋は「ヨーロッパの教養人に説明なしに理解される日本の伝統芸術が二つある。一つは俳句で、もう一つは能。パリを拠点に国際的に活躍している韓国人画家の言葉だ。俳句はエズラ・パウンドを通して二〇世紀の世界詩を大きく変えたといわれる。能は二十一世紀の世界演劇を変えうるか。変えうるとしたらどう変えうるのか」と述べている。

以上のように、能と俳句は歴史的にも内容的にも深い関係にあることが分かってきた。俳句は現在、大変なブームで多くの方々が俳句を学んでおられる。テレビのプレバトも人氣があり、多くの有名人が出演している。

しかし、能謡曲は、極めて少数である。理由はいくつか挙げられる。プロの能楽師が少ないこと、大都市に集中しており地方都市は一部を除いて皆無に近い。さらに謡を指導する教士、教授の数が極めて少ない。私は現在謡曲を習っておられる方に教士の免状を取り多くの方々に指導していただきたいと願っている。日本能楽協会も、もっと能謡曲を普及するためにより安価な免状取得システムを考えて頂きたいと思っている。俳句のようにもつとだれでも気楽に始められるよう、尽力していただきたいと願っている。能謡曲は、指導者が少なく、とてもカネと時間がかかるのがネックである。私も少ない給料から費用を捻出するのに苦労した。提案としては、謡教士の下に謡見習いのような資格を新設し、誰でも気軽に安い値段で謡を学べるようにしたらどうだろうか。日本能楽協会でも検討してもら



2019年出水市文化祭で「田村」「鬼界島」発表

えれば幸いである。そうすれば能謡曲のファンの層が広がり、能の鑑賞者も増えるだろう。国としても、もっと伝統文化芸能に多くの人々が気軽に安価に参加できるように資金援助をしていただきたいと思います。それが、より豊かな日本人の文化を継承していくことにつながるのではなからうか。俳句人口なみに能謡曲人口が増えれば、より豊かな精神文化生活を送れるようになるだろう。

かくして、小中高とアメリカにあこがれ、英語が好きだった私が、YMCAでの多くの国々との国際交流体験を通じて、五十年代になってようやく日本の歴史、伝統芸能文化「能謡曲」に目覚め、その過程で、日本の伝統芸能文化、とりわけ語り音楽の奥深さを味わい、今俳句の奥深さを知り、日本人に生まれたことを心から幸せと感じている。現在七十三歳、これからいつまで生きれるかわからないが、

死ぬまで謡曲と俳句を続けていきたいと願っている。

(出水市文化協会理事、喜多流謡教士)

《参考文献》

- ・「改版謡曲基歌集」門脇達祐 平成一四年高山プレスシステムセンター
- ・三村 昌義「虚子能楽関係年表」
- ・稲畑汀子「大きな活字のホトトギス新歳時記」(一九九一年三省堂九九九p)
- ・木佐貫 洋「芭蕉、蕪村、子規の俳句と能」総合文化研究第一号「子規の俳句と能」日本大学大学院総合社会情報研究科紀要二〇〇二

